

## 輸入品流入は止まった？ ～ 電子部品・デバイス工業について ～

わが国製造業の現状を、わが国の国内需要（国内生産 - 輸出 + 輸入）に占める輸入品の割合を表す「輸入浸透度（注）」から見てみよう。

2000年末の不況突入と軌を一にして製造業全体の輸入浸透度は、一段階アップした。90年代後半の10%強から足元では12.5%前後になっている。

（注）輸入浸透度 =  $\left[ \left( \text{輸入指数} \right) \times \left( \text{輸入ウェイト} \right) \right] \div \left[ \left( \text{総供給指数} \right) \times \left( \text{総供給ウェイト} \right) \right] \times 100 (\%)$

その中でも、今や国内生産が激減、開発輸入を含めた低価格の輸入品の流入拡大から、繊維工業においては、輸入浸透度は90年代後半の17%から03年7～9月期は34%にまで上昇している。

一方、現在わが国製造業中、最も好調と言える電子部品・デバイス工業の輸入浸透度は、01年4～6月の14%をピークに下落を辿り、03年7～9月期は10.8%に低下した（図1）。

この動きは、輸入品の流入が収まったことを示しているのであろうか。

電子部品・デバイス工業の供給動向を、国産品と輸入品それぞれに分けてみると、国産品、輸入品ともに伸びていることがわかる（図2）

電子部品・デバイス工業でも、必ずしも輸入

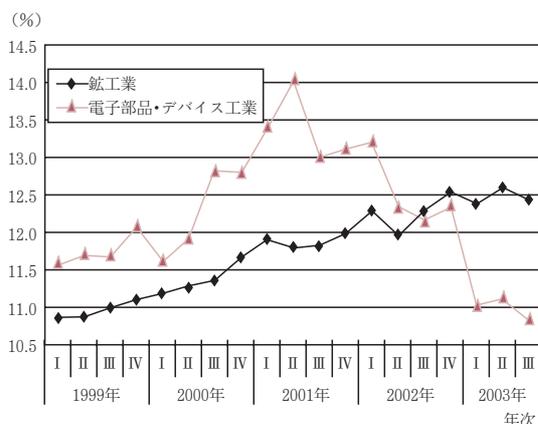
品の流入が収まったのではないことがわかる。電子部品・デバイス工業の生産を見ると、デジタル情報家電の主要部品であるアクティブ型液晶素子やCCD、大規模集積回路などの生産増加がきわだっている。つまり、DRAMなど生産技術が海外に追いつかれコスト的にも割安に供給される輸入品の流入増加と日本の技術の優位性を生かした国産品の生産拡大が同時に起こっているとみるのが、適切なようだ。国際間の分業は着実に進んでいる。

また、日本の製造業がITバブル崩壊後、加工組み立て作業については海外の製造拠点に、基幹部品の開発・製造は国内に残す方向で動いていることも電子・デバイス工業で国産品の比率の増加が顕著に表れていることの背景にある。

デジタル家電分野の世界的需要拡大のもとで、中期的に電子部品・デバイス工業が国際競争力を保ち牽引役になることが見込まれるが、追い上げは厳しい。デジタル家電分野および電子部品・デバイス工業に見られた、製品技術の蓄積、選択と集中を推し進める姿勢が、今後も重要だろう。

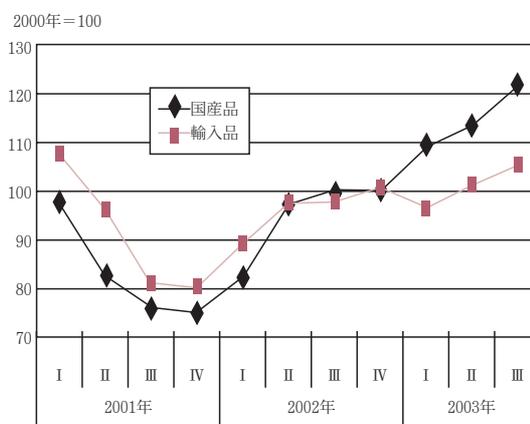
（田口）

図1 輸入浸透度（鉱工業生産）



経済産業省「鉱工業総供給表」より農中総研作成

図2 電子部品デバイス工業の供給動向



経済産業省「鉱工業総供給表」より農中総研作成